

第1回腎病理夏の学校報告

腎病理夏の学校はじめて開催される。 腎病理への熱気あふれる2日間

信州大学医学部病理組織

江原 孝史

「腎生検病理診断標準化の指針」が今年6月新たに発刊されました。これにあわせ、8月13日、14日の2日間に、腎病理標準化を推進し実践する目的で、系統的に腎病理を勉強する講習会が、松本市の信州大学で腎病理夏の学校として開かれました。土曜の午後から始まった講習会は学生の講義室を使い、全国各地から腎臓内科医を中心に40名の参加者に加え、腎病理医協会員約20名が講師、チューターとして参加しました。そのときの様子などをこの誌面をお借りして報告します。

蟬時雨の中、杉崎祐一先生の開校挨拶のあと日本腎臓学会・腎病理診断標準化委員会委員長の槇野博史先生から、標準化の経緯の説明や指針の発刊のエピソードなどを語っていただきました。次に指針の

本の流れに沿って腎病理の基礎編として、染色のコツ、PAM染色の重要性などを山中宣昭先生がユニークなスライドを使って解説しました。引き続き、田口尚先生が組織標本の見方、所見の取り方を解説し、上田善彦先生が蛍光抗体などの免疫染色の解説をしたあと、浜口欣一先生による電顕の見方や基本所見についての講義で前半はしめくくりとなりました。

コーヒープレイクをはさんでの土曜日の後半は実習編で、このセクションでは実際に顕微鏡を自分で見ること、かつ病理医と一緒に標本を観察してディスカッションし理解を深めることが重要と考えて、今回の一番の目玉と考えて内容を構成しました。具体的には、各講師の先生の選んだ腎炎症例5例の標



写真 1



写真 2

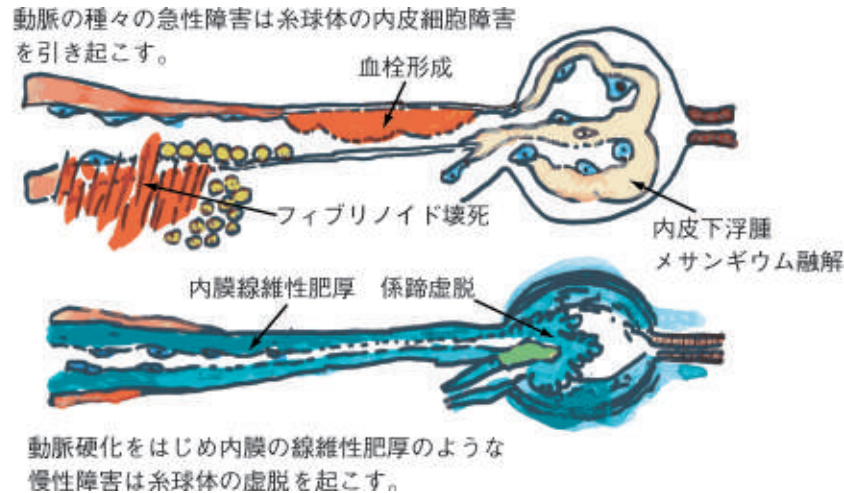


図 重松秀一先生手描きスケッチ

本の検鏡を1人用の顕微鏡と5人用ディスカッション顕微鏡5台を使って行いました。その際、参加者を5グループに分け各グループに病理医協会員がチューターとして加わって症例を説明し、かつ参加者個人のいろいろな疑問や質問にも答えられるようにしました。これは、ふだん専門の病理医のいない施設で診断されている先生も多いと考えたためです。実習に入ると講義室のあちこちでチューターを困む輪ができていましたが、病理医同士の意見交換の場ともなっていました(写真1, 2)。実習の最初はIgA腎症(城謙輔, 以下敬称略)で次に膜性腎症(上田善彦), 膜性増殖性腎炎(久野敏)とつづき, 巣状糸球体硬化症(城謙輔)で初日が終了しました。予定時間を大幅に超過してしまい懇親会の時がずれこんでしまいましたが, 懇親会でも討論が続いていました。

翌日は, 朝8時過ぎから重松先生が『腎病理標準化: 腎障害をどうとらえるか』というタイトルの特別講義をされました。病変を血液の流れに沿ってスキャンし, 組織変化を慢性と急性の活動度でとらえ

ながら考えるというもので, 手描きのスケッチをいれた先生独特の表現もはいいり, 興味深い講義でした(図)。日曜の朝早くにもかかわらず遅刻者もなく全員出席という盛況ぶりでした。

特別講義のあとは昨日に引き続き腎炎の実習を行いました。糖尿病性腎症(北村博司), ループス腎炎(長田道夫), 尿細管間質血管障害(江原孝史), 移植腎(山口裕)の順でしたが, 時間がまた延長してしまい列車の時間などのため移植の項の最後まで聞けなかった先生が何人もおられたのは残念でした。

今回の夏の学校ははじめての試みで, 正味一日では中身が盛りだくさんすぎ, また実習では各講師の持ち寄った腎炎症例40例を十分消化しきれなかったり, などいろいろ問題もありましたが, なんとか最後までいくことができたのは, 参加の先生方と病理医協会員の熱意のたまものでした。これからも腎病理の普及のためのこうした催しが継続してできればいいと思います。最後に, 日本腎臓学会からの財政援助をいただいたことをこの場をお借りして感謝いたします。